

Evelyn Goh,

*Constructing the U.S. Rap-
prochement with China,
1961-1974: From “Red
Menace” to “Tacit Ally”.*

Cambridge: Cambridge University Press,
2005, xiv + 299pp

ます お ちさこ
益 尾 知 佐 子

1971年7月、米国のニクソン大統領は、キッシンジャー大統領補佐官が中国を訪問したこと、また自らも翌年5月までに中国を訪問することを発表し、世界に電撃的なショックを与えた。世界の冷戦構造の転換点であった。ニクソンは、共産中国と手を結ぶことによって、米国が米中ソ3極構造のなかで唯一、第二国との関係を、第三国を牽制する材料とすることができる優位なポジションに立つことをねらったとされる。

ニクソン政権の米中和解は、国際関係における重要性、そしてその意外性のために、これまで多くの研究者の関心をひきつけてきた。ただしその大部分は、現実主義の立場から、劇的な米中接近が「なぜ」(why?)起こったかを次のように説明するものであった。当時世界の常識では、自由主義を掲げる米国と、ソ連よりも頑固に共産主義イデオロギーに固執する中国との関係改善は不可能とされていた。しかしニクソンとキッシンジャーは、ベトナム戦争からの名誉ある撤退を目指し、国際関係理論でいう現実主義の立場から米国の対外政策を再考した。そこで思い至ったのが、ソ連との関係悪化と国際的孤立のために既存の勢力均衡内で弱い立場にあり、しかもベトナムに強い影響力を持つ中国に接近することであった。これによって、ベトナム戦争を終結さ

せ、中国との関係を牽制材料としてソ連にデタントを吞ませることが可能になると考えたのである。米側側の思惑は、1969年の中ソ国境紛争後、自国の安全保障に苦悩していた中国側の国益と一致し、パキスタンルートによる秘密交渉によって、キッシンジャーの中国訪問が実現した。

このような説明は、米中和解がもたらされた直後からなされてきたし、最近公開された外交文書でも裏付けられており、いわば米中接近に関する主要な言説となっている。ところが本書の著者であるエヴェリン・ゴーは、国際関係論と歴史学の両方の観点から構造主義に着目し、米中和解に新鮮な問いを投げかけている。米国は「赤の脅威」とみなしていた中国を、米中関係改善を経て、「どのように」(how?)米国の「暗黙の同盟国」と考えるようになっていったのだろうか、という疑問である。

ゴーによればまず、これまでの説明は歴史的なコンテキストを欠いている。中ソ関係の悪化は1962年には明確であり、現実主義的な説明では、なぜ米中接近が71年までかかったのかわからない。2点目に、政策決定および政策形成プロセスに充分焦点を当てていない。言い換えれば、米国が、最悪の敵・中国をどのように友人、さらには暗黙の同盟国へと位置付け直していったのか、どのようにその認識のギャップが埋められていったのか、を明確にしてい

ない。そこで、以上のような先行研究の欠点を補うものとして、ゴーは外交政策決定における言説(discourses)の重要性に着目する。そして本書の目的を、米国の対中認識と中国政策をめぐる言説およびその変容を明らかにすることで、どのように米中接近がもたらされ、またその後の米中関係の基盤が形成されたかを説明すること、と設定する(pp.4-6)。分析対象は、ケネディ、ジョンソン、ニクソン3政権期における米国の指導者と中国担当実務者の中国観と対中政策をめぐる言説である。この課題に切り込む工具として、彼女は近年入手可能となった大量の米国外交文書を駆使している。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 序論
- 第1部 競合する言説 1961年～1968年
 - 第2章 「赤の脅威」から「革命的ライバル」へ
練り直される共産中国の脅威
 - 第3章 「苦悩する近代化国家」から「再起する
大国」へ 修正主義者の中国イメージと
新しい中国政策に向けた議論
 - 第4章 修正主義者の遺産 1968年以前の
中国との和解についての言説
- 第2部 言説の変遷 1969年～1971年
 - 第5章 背景としてのニクソンの中国政策の
言説
 - 第6章 和解をめぐる議論 「再起する
革命的な大国」対「おびえる主要大国」
- 第3部 実践における和解の言説 1971年～1974
年
 - 第7章 「原則」を守る現実主義的大国 新
しい関係の言説的基礎の構築 1971年
7月から1972年2月
 - 第8章 実践における原則 米国の和解への
決意がもたらした政策的インプリケー
ション
 - 第9章 和解の「売りつけ」 ニクソン政権
の新中国政策の正当化
 - 第10章 「暗黙の同盟」 1972年6月から1974年
米中和解の強化または保全
- 結 論

本書の概要は以下のとおりである。

第1章では、まず前述したような問題意識が展開される。そのうえで、1969年の段階で、ニクソン政権が世界の勢力均衡への対応としてとり得たオプションが4つに整理されている。第1オプションは、中ソ論争が継続し共産陣営が弱体化するのを横目で見ながら、あえて何もしない。第2オプションは、ソ連を支援して中国に対抗する。第3オプションは、

ソ連とも中国とも関係を改善する。第4オプションは、中国を支援してソ連に対抗する。どのオプションも権力政治の観点から理由付けすることができ、また実際にワシントンの関係者の間で議論されていたものである。そして、なぜ第1、第2オプションが捨てられ、第3、第4オプションが有力となったのか、さらにどちらのオプションがいつ、なぜ選ばれることになったのか、という疑問が提示される。

第1部では、1961年から68年にかけての米国の中国政策担当者の言説を中心に、彼らの間で行われていた中国政策をめぐる議論が取り上げられる。競合する複数の言説をゴ－は次のように整理する。1960年代初頭、中国を共産主義かつ軍事的拡張主義と捉える「赤の脅威」言説が主流であった。この見方は朝鮮戦争以降米国ですでに確立していたものである。これに加えて、中ソ関係の悪化を受け、1960年代前半には「革命的ライバル」言説が生まれてくる。これは中国をソ連よりも極端な共産主義者で、世界革命の実現のために世界の反米勢力内部に浸透して米国に対抗する新しいタイプの侵略者とする。2つの言説は、どちらも中国を米国の敵対的存在として位置付けるものであった。

ところがこのころから並行して、よりリベラルな観点から中国との関係改善を唱える意見が現れる。「苦悩する近代化国家」の言説は、大躍進の失敗を受けて、中国が開発途上国一般の社会・経済システムの悩みを抱えていることを強調する。この言説の主張者たちは、中国の国際的な孤立を和らげることで、米国に対抗的な中国の姿勢を徐々に変化させることができるとする。さらに1960年代半ば、特に64年の中国の最初の核実験成功以降は、古くからの中国専門家の間から中国を歴史的な大国と捉え直す「再起する大国」言説が生まれる。彼らは中国を、西側諸国からの屈辱に憤り、かつて自らが持っていた世界的威厳を復活させたいと望む大国として捉え、中国を国際レジームに受け入れ大国として遇することで中国の振る舞いを良くできると主張した。1966年以降、これらの修正主義的な見方はワシントンの対中政策関係者の間では主流となり、中国との関係改善のため米国側がイニシアチブをとる

べきだとする声は強まっていた。しかし、国内の官僚政治と米国に対する中国の強硬姿勢のため、実際の和解はもたらされなかった。

第部では、1969年から71年までの転換期を中心に議論が進められる。まず注目されるのは、米中和解の立役者とされるニクソンの対中言説である。もともと対中封じ込めを唱えていたニクソンは、1960年代後半以降、前述したような修正主義者の言説を吸収し、中国の一時的な弱体化と将来的な再起の可能性に着目して、中国と交渉し世界の冷戦対立を和らげるべきと提起するようになっていた。次に、ニクソン政権内の中国政策論争が取り上げられる。従来の研究では、米中和解以前、国務省は新しい中国政策に否定的であったとされている。しかしゴーは、中ソ国境紛争で米国にとっての戦略的好機が明確になっていたこの時期、国務省はホワイトハウスに先立って中国との関係改善を議論し始めたと指摘する。相異なる4タイプの言説を基礎に、国務省側は中国を「革命的な再起する大国」と捉え直した。これに対し、中ソ国境紛争での中国の劣勢を強調するホワイトハウス側は中国を「おびえる主要大国」と規定し、中国の安全保障を維持することで世界の勢力均衡を保つべきと主張した。1970年の米中ワルシャワ協議の失敗で中国政策の担い手はホワイトハウスに移っていくが、この論争にみられるように、ニクソンとキッシンジャーが新しい中国政策を練り直す過程では、それ以前の修正主義的言説が大きな貢献を果たした。

第部は、ニクソン政権の中国政策の実行過程を言説面から分析している。具体的には、米中和解が国内世論のなかで、また中国自身に対してどのように正当化されていったかが問題とされる。米中和解は現実主義の産物といわれるが、ニクソンらは国内世論の説得において、よりリベラルな修正主義者の言説を活用し、親台湾派など保守勢力に対してのみ現実主義的な勢力均衡論を用い、反対を押さえ込むのに成功した。また中国に対しては、米国側は実際には第3オプション（中ソ双方との関係改善）の実現を目指していたものの、米中両国に共通の安全保障上の国益（ソ連の押さえ込み）が存在することを

強調して関係改善を理由付けした。ところが中国側は、ニクソンの訪中以降、一方でソ連の脅威を米国以上に主張するようになり、他方で米国側の台湾問題の処理について懸念を表明するようになった。米国側、特にニクソンの中国訪問以降に中国政策の中心人物となっていたキッシンジャーは、台湾問題に関する中国の不満を和らげる必要からソ連を米中の共通の敵と強調することになった。こうして彼は1973年以降、米中の戦略的協力を進める名目で中国にひそかに軍事面の物質的支援を行うことをも約束した。つまり米中和解のあり方は、中国と実際の関係を構築していく段階で、米国の指導者が当初ねらっていた第3オプションから第4オプション（米中共同でソ連に対抗）に変化していったのである。

エヴェリン・ゴーは現在、シンガポールの南洋理工学国防戦略研究所の助教授である。本書は彼女がオックスフォード大学ナッフィールド・カレッジに提出した博士論文がもとになっている。

本書は米国3政権の14年間を分析対象とし、米中和解に関連する言説が、考察の段階から実行に移されるまでの段階でどのように構築され変容したかを包括的に考察している。本書の第1の意義は、冷戦後に注目されるようになった構造主義の実証分析としての質の高さである。ゴーの次の指摘は適切である。「歴史学とポリティカル・サイエンスは潜在的に研究内容がオーバーラップする。特に過去の出来事が国際関係のその後のあり方をどのように形作っていくのかに注目する構造主義は、異なる2つの研究分野のギャップを埋めるアプローチ方法として有望である」(p.258)。従来から、構造主義に関しては説得力のある実証分析が少ないという指摘がある。ところがゴーは、米国の外交文書に残された言説に的を絞り、タイプの異なる言説を見事に整理することで、構造主義の適用が難しいと考えられていたハイポリティクスレベルの国家間関係に対して大胆で説得力のある分析を行っている。

これに関連して、第2の意義は、語り尽くされた

感すらある米中和解という出来事に対し、全く新たな見方を提示していることである。米中和解については、国際関係論だけでなく歴史学においても、勢力均衡や国益や軍事力を重視する現実主義の立場からこれを説明する研究が支配的である。ところがゴーはこれに構造主義を持ち込み、以前の現実主義的な説明が見落としていた重大な発見をいくつもやっている。例えばこれまでの研究では、中国政策の練り直しに当たってはニクソンやキッシンジャーの思考の独創性が強調されてきたが、ゴーによれば、中国問題担当の実務者たちによって1960年代に形成された修正主義の言説が、ニクソン政権が新しく中国政策を練り直す際の思想的基礎を提供したとされる。また意外なことに、世界戦略を見据えて中国との和解を実行に移していく段階で、台湾問題の処理という米中2国間関係の問題がきっかけとなり、米国にとっての中国の位置付けが「暗黙の同盟国」へと変化していったこと、その担い手が現実主義の論客として知られるキッシンジャーその人であったことも指摘されている。これによって、現実主義的で叙述志向の強い歴史研究の領域においても、手法と理論の精製の余地があることが示されている。

第3に、以上のような理論的な枠組みを支える資料の豊富さである。ゴーが用いた資料には、ケネディおよびジョンソン政権期のFRUS (*Foreign Relations of the United States*)、大統領図書館やナショナル・アーカイブス所蔵のもの、その他の國務省の刊行物、口述資料、インタビュー、メモワールなどがあり、なかには近年利用が可能となった膨大な数の一次資料が含まれている。そのため本書は資料面においても、信頼できる最先端のテキストとなっている。

なお、ゴーの分析は米中関係に関する現実主義的な先行研究を否定するものではなく、それらと重ね

合わせることでより興味深い結果を導き出すというスタイルである。ゴーが示したように、同一の状況下で現実主義の立場をとっても、実際にはいろいろな政策オプションがあり、そのなかで何が選ばれるかは過去の認識とその場の状況に依存する。人や国家の認識や考え方、または文化に着目して政策決定・形成過程を分析する試みはこれまでも多くなされてきたが、必ずしも成功例が多かったとはいえない。構造主義の長所と弱点を慎重に踏まえて編まれた本書は、先行研究と対照することで、米中和解の解明に建設的な貢献を果たしている。

本書には、この手の大胆で野心的な試みにありがちな粗雑さではなく、歴史学者特有の緻密で精巧な美しさがある。理論研究者にとっても実証研究者にとっても、また米中和解に関心を持つすべての読者にとっても、刺激的で満足度の高い1冊であろう。

文献リスト

- Dittmer, Lowell 1992. *Sino-Soviet Normalization and Its International Implications, 1945-1990*. Seattle: University of Washington Press.
- Elman, Colin and Miriam Fendius Elman eds. 2001. *Bridges and Boundaries: Historians, Political Scientists, and the Study of International Relations*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Ross, Robert S. 1995. *Negotiating Cooperation: The United States and China, 1969-1989*. Stanford, CA: Stanford University Press.
- Ross, Robert S. and Jiang Changbin eds. 2002. *Re-examining the Cold War: U.S.-China Diplomacy, 1954-1973*. Cambridge, MA: Harvard University Asia Center.

(日本学術振興会海外特別研究員)